た。その結果、診療体制は各施設で大きくばらつきがみられた。施設によっては、眼科医が少ない、もしくはいないために主観的診断しかできない状況が多くみられる。現在、多くの施設で行っているROP診療は、客観性に乏しく経過の比較を行いにくい状況である。ROP診療に関して、全国的なスクリーニング・治療基準の標準化が必要と考えられた。客観的診察として眼底カメラは有用であるが、マンパワーの確保、トレーニング法について課題が挙げられた。今後小児科医・新生児科医が本疾患の診断に関わることが可能になれば、新たな原因の究明ならびに予防法・治療法の開発につながる可能性がある。

4) PDA閉鎖手術が予後に与える影響の検討（長屋　建　旭川医科大学、森　臨太郎　大阪府立母子保健総合医療センター）

外科施設を持たない施設で外科治療の可能性のある未熟児動脈管開依存症（PDA）を診療する場合、搬送に伴うメリット・デメリットを考慮し治療法が選択される。そこで、データベースを用いて PDA 外科治療のリスク因子を検討して、対象は登録患者7,949例中、先天異常を除きPDAと診断された2,281例。登録63施設をligation症例数で33.3パーセンタイルにより、多い施設（A）群、中間（B）群、少ない施設（C）群の三群に分け、ligationの有無で新生児予後を比較した。その結果、ligation 施行は退院時死亡のリスクを施設 A 群において有意に56%減らし(OR 0.44, p=0.006)、施設C群でリスクを 78%高める傾向を認めた(OR 1.78, p=0.38)。施設B群では同等のリスクであった（OR 0.96, p=0.93)。手術件数の多い施設でのPDAの ligation 治療ほど退院時死亡を少なくする可能性が示唆された。

5) 慢性肺疾患重症化因子の検討（市場　博幸　田中　裕子　大阪市立総合医療センター）

共通データベースを用いて、2003-2005年出生児の慢性肺疾患の重症化因子について検討した。その結果、胎盤病理検査を含めた、絨毛膜羊膜炎の評価はその後発症する慢性肺疾患の重症化を予見する因子として重要であった。

6) 出生前ステロイド投与の有効性のマルチレベルモデルを用いた分析（林　啓一　帝京大学小児科）

共通データベースに参加している 65 施設で2003年から2006年に1,500g以下にて出生の児 11,155 例(1,034 例死亡)を、データの階層性を考慮したマルチレベルモデルを用いて分析した。個々の症例レベルで調整して死亡の施設間格差を分析し、格差をもたらす原因として出生前ステロイド投与を考慮した。Case-mix(母児の要因)をモデルに組み込んでも施設間格差は存在し、1,000g未満や28週未満のハイリスク集団では施設間格差が大きくなった。出生前ステロイド投与で死亡のオッズは 0.64 倍（95%CI:0.53-0.78）と有意に減少しており、出生前ステロイド投与を受けなかった死亡708例のうち237例は出生前ステロイド投与で回避の可能性があった。

平成21年度

1) 晩期循環不全の臨床背景の検討

周産期母子医療センターネットワークデータベースを活用して（内山　温　東京女子医科大学母子総合医療センタ）

2003ー2007 年のデータベースを用いて晩期循環不全の臨床背景について検討した。その結果、晩期循環不全の発症頻度は 6.7%であった。年度別推移では、2004年度以降年々増加し、2007年度は、おおよそ10%が発症した。発症例と非発症例の比較では、有意に在胎期間(26.3±0.1週 vs 29.4±0.0 週, P<0.0001）が短く、出生体重（779±11g vs 1,069g±3g, P<0.0001）が小さかった。多変量解析を行ったところ、出生前要因（妊娠高血圧症候群の合併がない、前期破水、母体ステロイド投与)、出生時要因（短

い在胎期間、低い Apgar score 1 分値)、そして出生後要因（呼吸窮迫症候群、症候性動脈管開存の合併）が発症に関連した要因であった。

2) 慢性肺疾患の危険因子の検討（戸津五月　東京女子医科大学母子総合医療センター）
CLD 発症の危険因子を検討し、その発症頻度の減少につながる可能性のある因子について検討した。共通データベースに登録された、出生体重 1,500 g 以下の児のうち、データベースのすべての項目が記入されている症例を対象とした。多変量解析の結果、妊娠高血圧・子癇発作、在胎期間、RDS、空気漏出症候群、子宮内感染、敗血症、晩期循環不全に対するステロイド投与の７項目が、CLD 発症に関する独立した有意な危険因子であった。

3)「周産期母子医療センターネットワーク」施設データベースと厚生労働省人口動態統計との比較（山口文佳　東京女子医科大学　小児科）
ネットワークデータベースの問題と課題を明らかにするために、厚生労働省人口動態統計から、本データベースとの共通項目を抽出して比較した。その結果、登録症例数は全国の極低出生体重児総数の 42%であった。登録群の体重構成は全国より低出生の割合が多かった。登録群の早期周産期死亡率は全国の約３分の２で、統計学的にも有意に低かった。極低出生体重児の早期新生児死亡の死因は、登録群では先天異常、脳室内出血、敗血症の順であったが、人口動態統計では、先天異常、新生児仮死、呼吸窮迫の順であった。以上の結果、本データベースの登録施設は、全国平均より医療水準は高く、日本の極低出生体重児医療を代表しているとは言えない。

4) 在胎週数２２・２３週の超早産児における出生前ステロイド投与の有効性について（森臨太郎　東京大学大学院医学系研究科・国際保健政策学）
出生前ステロイド投与は 24～34 週までの切迫早産において投与することが奨められている。一方我が国においては在胎 22、23 週といった超早産児の生存率が向上してきた。そこで、データベースの在胎 22～33 週までのデータが得られた 11,607 例において、出生前ステロイド投与の有効性をロジスティックおよびコックス回帰分析にて検討した。その結果、出生前ステロイド投与は、在胎 22、23 週で肺の成熟を促進するという根拠は認めないものの、死亡率の低下を示した。この機序には脳室内出血等、肺の成熟促進以外の要素がかかわっている可能性がある。ただし、児の精神発達については不明である。今後ランダム化比較試験による検討が望まれる。

5) 地域病院と連携した総合周産期母子医療センターNICU・GCU 病床の有効的な運用に関する検討（中村友彦、廣間武彦　長野県立こども病院）
長野県立こども病院は長野県唯一の総合周産期母子医療センターで、長野県内出生の超低出生体重児の約７割、重症先天性心疾患児、手術を要する外科や脳外科疾患児のすべて受け入れている。そこで、「重症児または急性期は当院で、その後の急性期以降は送り搬送による転院によって地域の周産期医療機関・小児科機関で管理」という連携システムを構築し、積極的に地域病院へ搬送を行い、地域の病院が GCU として機能している。その結果、当院新生児科の極低出生体重児の年間入院数は増加傾向にあるが、NICU・GCU 病床稼働率、平均在室日数は減少している。特記すべきは極低出生体重児の転院率で 2008 年度は 81%であった。また送り搬送後のフォローアップ体制も整備され、2005 年度当院に入院した極低出生体重児のフォローアップ率は 94.2%であった。現在国立大学病院を中心に NICU 病床数の増加整備がおこなわれているが、全国的に慢性的な NICU 病床数不

足問題の早急な改善策が必要と思われる。効率的な NICU 病床稼働システムを県単位もしくは総合周産期センターを中心に構築する必要性があると考えられる。

6) 組織学的絨毛膜羊膜炎に対する臨床学的絨毛膜羊膜炎の陽性予測力（徳増　裕宣　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻臨床研究者養成コース（薬剤疫学分野））
組織学的絨毛膜羊膜炎（以下 HCAM）は娩出前に予測され、その多くは臨床学的絨毛膜羊膜炎（以下 Clinical CAM）と診断される。Clinical CAM の診断がつくと、早期娩出か待機かを選択する。しかし、そのような重要な因子であるにもかかわらず、早産児における HCAM に対する Clinical CAM の陽性予測力ははっきりしていない。そこで、1,500g 以下児での検討を行う。

7) ハイリスク児の予後改善のための施設ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽを用いた分析（米本 直裕 大阪府立母子保健総合医療センター）
データベースを用いて、双胎児の院内死亡および罹患についてのリスクを検討した。対象は、2003 年から 2007 年までの、1,000 g 未満の単胎児と双胎児で、院内出生であった児である。双胎で両方の児が対象であるもの、片方の児のみが対象であるもの、をそれぞれ単胎児と比較した。REML 法を持ちいたロジスティック回帰分析を用いて解析を行った。交絡の調整には、性別、出生体重、週数を用いた。5,296 人が対象となり、単胎 4,076 人、双胎 1,220 人であった。双胎のうち、両方とも対象となった児は 832 人、片方のみ対象となった児 388 人であった。院内死亡は単胎で 564 名（13.8%）、双胎で両方の児が対象であるものでは 118 名（14.2%）、片方の児のみ対象となるものでは、65 名（16.8）であった。死亡に対するリスクは、単胎群に比べて、双胎で両方の児が対象である群は、調整後オッズ比　0.49　(95%CI：0.08-3.73)、片方のみ対象の群では、1.40（95%CI：1.03-1.87）であった。本データベースには多胎の場合における個々の児が一意に直接対応した情報がなく、今後データベースに多胎児の対の特定に関する情報が入力されることが望まれる。

8)　周産期ネットワークデータベースによる母体搬送・新生児搬送に関する検討 第２報；搬送における背景因子について（和田　浩　淀川キリスト教病院、米本直裕　大阪府立母子保健総合医療センター）
5 年間のデータベースに登録された低出生体重児のデータを用い、母体搬送および新生児搬送における背景因子について考察した。年次推移では、新生児搬送は年々減少し母体外来紹介例が増加していたが、母体緊急搬送例には大きな変化はなかった。母体外来紹介では、超低出生体重児また母体に基礎疾患がある例の全体に占める割合が増加しており、より早期に紹介となっていた。臨床的絨毛膜羊膜炎が認められる例では緊急母体搬送の全体に占める割合が高く、緊急度の高い母体 Steroid 投与は、新生児搬送例において施行の割合が低い。

3.　NICU 必要病床数の調査

1) NICU 必要病床数の調査（楠田　聡　東京女子医科大学母子総合医療センター、研究協力者杉浦正俊、多田　裕、網塚貴介、内山　温、大木　茂、和田和子）
平成 6 年の厚生省心身障害研究（ハイリスク児の総合的ケアシステムに関する研究、分担研究者：多田　裕）で計算された全国の NICU 必要数（2 床/出生 1000）を、現時点でのハイリスク新生児発生数およびその予後に合わせて再度推計した。1) 平成 6 年と比べて平成 17 年では出生体重 2,500g 未満のハイリスク新生児の発生率は約 30%増加した。一方、新生児死亡率は 40%改善した。したがって、平成 6 年に比べてより多くのハイリスク児が NICU で治療を受けている現状が明らかとなった。2) 年間のハ

イリスク児の発生数および NICU 在室期間を推計するために、全国の主要な周産期医療施設の入院児数および NICU 在室期間を調査した。その結果、全国では年間およそ 36,000 例の新生児が NICU での治療を必要としていると推計された。さらに、これらのハイリスク児の出生体重別および疾患別の発生数および平均 NICU 在室期間が推計できた。3) ハイリスク新生児の発生数および NICU 在室期間から、全国の NICU 必要数を推計した結果、現時点での NICU 必要数は約 3 床/出生 1000 となった。これは平成 6 年に比べて 50%増加していた。4) NICU の増床対策として、短期的には重症児の管理を常時受け入れられる NICU を 2.5 床/出生 1000 確保する。そのためには、全国で 200～500 床の NICU 増床が必要である。5) 長期的には、病床、施設、地域の機能分担を含め、NICU をさらに増加させ、目標値の 3 床/出生 1000 を達成する。

出生体重別に計算した NICU 必要数

出生体重 (g)	年間出生 (人)	NICU入室症例 (人)	NICU入院率 (%)	NICU入室期間(重症期) (日)	総在院期間 (日)	NICU必要数(重症期) (床)
-499	250	250	100	100.5(97.3)	103.8	68.8(66.6)
500-999	2865	2865	100	96.4(71.9)	121.4	756.2(564.0)
1000-1499	5082	5082	100	64.9(43.7)	84.1	903.0(608.0)
1500-1999	13531	6934	51	24.2(14.9)	39.0	459.4(282.9)
2000-2499	79544	8602	11	16.2(8.5)	24.9	381.5(200.2)
2500-	961258	12678	1	16.7(11)	22.0	579.7(381.8)
計	1062530	36411	3			3148.6(2103.5)
					出生1000当たり	2.96(1.98)

疾患別に計算した NICU 必要数

	疾患	年間入室症例(人)	NICU入室期間(重症期) (日)	総在院期間 (日)	NICU必要数(重症期) (床)
極低出生体重児	―499g	250	100.5(97.3)	103.8	68.8(66.6)
	500-999g	2865	96.4(71.9)	121.4	756.2(564.0)
	1000-1499g	5082	64.9(43.7)	84.1	903.0(608.0)
病的新生児 呼吸障害	1500-1999g	6642	17.7(8.6)	32.7	321.9(156.4)
	2000-2499g	6518	10.3(5.2)	19.3	183.8(92.8)
	2500g-	9542	5.9(2.7)	10.4	154.1(70.5)
重症仮死		700	94.5(92.3)	99.4	181.1(176.9)
痙攣		38	16(4.5)	25.5	1.7(0.5)
交換輸血		182	4.3(3.3)	8.0	2.1(1.6)
外科疾患		823	66.8(36.6)	79.9	150.5(82.5)
先天性心疾患		1687	23.5(12.3)	30.3	108.5(56.8)
奇形症候群		1496	47.4(28.7)	57.2	194.1(117.6)
神経疾患		824	48.7(33.4)	56.7	109.9(75.4)
計		36650			3135.8(2069.5)
				出生1000当たり	2.95(1.95)

2) わが国のこれからの周産期医療システム (多田　裕　実践女子大学)

平成 8 年度から実施された周産期医療整備対策事業は、この 10 年間の周産期医療の変遷により改定する必要が高まっている。改定の必要性が生じた主な要因は、新生児医療の向上による重症児の死亡率の減少とそれに伴う重症期間の著しい延長、リスクのある妊婦の増加による NICU 入院対象児の出生数の増加である。産科の医師不足も地域の分娩事情の悪化の原因であるが、母体搬送の受け入れ困難の原因の大部分は NICU の病床不足であり、NICU および新生児医療施設の整備が進まないと、1 次や 2 次の周産期医療施設の減少を止めることは出来ない。NICU および新生児医療の診療の大部分は小児科医である新生児科医が担当している。小児救急を担当している小児科医も不足しているので、小児科医確保対策により新生児医療から医師を移動させられる懸念がある。この対策としては診療科としての新生児科の認定と産科医、小児科医と共に新生児科医の確保対策を実施することが緊急の課題である。上記の結論に至る周産期医療事情と今後の周産期医療システム整備の方向を東京都の周産期医療事情から検討した。

3) 少子化の進行に伴う低出生体重児数の推移に関する考察（網塚　貴介　青森県立中央病院総合周産期母子医医療センター新生児集中治療管理部）

少子化の進行下における低出生体重児数の推移に関して、人口動態統計から得られたデータを元に解析した。少子化の急速な進行にも関わらず、低出生体重児は増加し続けている。これは出生体重が小さい程、その傾向が顕著である。またハイリスクとなる多胎・高齢出産も増加傾向にある。しかしこれら多胎・高齢の因子を除外しても低出生体重児の出生率はむしろそれ以上に上昇してきており、妊婦全体がハイリスク化してきている可能性がある。この低出生体重児数の増加は、現在の新生児医療体制構築当時と比べ、出生率で約 1.5 倍になっており、昨今、問題となっているハイリスク妊婦受け入れ困難の原因となっているとも考えられる。今後、何らかの抜本的な対策を講じない限り、我が国における周産期死亡率をはじめとした周産期医療の諸指標が悪化してくる可能性がある。

4) 新生児他科疾患に関する研究（和田和子　大阪大学医学部附属病院周産期母子医療センターNICU）

全国の周産期センターにおいて、 NICU および GCU 病床に入院中の他科疾患すなわち、早産低出生体重児および内科的疾患以外の症例の実態調査をおこなった。NICU, GCU の入院患者に占める他科疾患の割合は、それぞれ 9.5%, 11.4%であった。NICU, GCU ともに他科疾患の約 6 割は退院の予定がなかった。 現在の NICU 加算は出生体重によるが、重症度による基準も必要と考えられる。また、他科疾患症例の入院が長期にわたることも少なくない。他科疾患症例においては、入院中から、関係各科の医師、患者家族、地域とも連携し、在宅医療も視野に入れた退院計画をたてていく必要がある。

5) NICU 必要数を推定するための基礎数値の調査-有病率、平均在室期間、長期入院病床数、待機病床数についての検討-（杉浦正俊　杏林大学医学部小児科）

現在の周産期医療整備事業を構築する基礎となった平成 6 年厚生心身障害研究より 10 年が経過し、人口動態や疾病構造、医療内容に変化が生じている。NICU の必要病床数の算出根拠となる数値について、前回調査を踏襲しつつ実地調査を行った。 1）全国 NICU 126 施設に対して点有病率の調査を行い、出生体重別、基礎疾患別（出生体重 1,500g 以上例）に年間発生数を推定した。 2）出生体重別、基礎疾患別に NICU 重症期間、NICU 中等症期間、GCU 期間の必要日数を求めた。推定にあたっては平成 6 年厚生心身障害研究の基準を踏襲し、NICU と後方病床（Growing Care Unit; GCU）全てを含む値とした。 3）長期入院症例が NICU 病床に占める比率は 3.85%、GCU に占める比率は 3.82%、全体では 3.83%であった。 4）所謂“待機病床”は 8.1%であった。施設整備にあたっては待機病床の確保が必要と考えられた。

平成 19～21 年度まとめ

全国の主要な母子総合医療センターで管理された出生体重 1,500g 以下の児のデータベースの構築が完成し、多くのデータが蓄積された。このデータを分析し、わが国の周産期医療の課題と改善点を検討することが可能となった。ネットワーク全体の死亡率は 2003 年のデータベースの開始時に比べ有意に減少している。また、多くの合併症の頻度も減少が見られた。これらは、データベースの構築と、多くの研究協力者による分析結果の参加施設へのフィードバックが重要な役割を担っていると推測される。しかし、一部の合併症では、頻度に低下が認められないことから、さらなる背景因子の検討が必要であった。データベースは今後 Web 上で管理が可能となり、予後とのリンクが可能となった。今後さらに発展すると考えられる。また、データベースの Database Quality Improvement

Conference を 3 回実施した。このカンファレンスにより、多くの検討結果を集中討議することが可能となった。3 年間の研究で、このような大規模データベースを構築し、そして維持することの重要性がさらに明らかとなった。

一方、NICU 必要数の検討では、ハイリスク新生児の発生率の増加、新生児の予後の改善から、より多くのハイリスク児が NICU で治療を受けている現状が明らかとなった。そのため、NICU の増床対策として、短期的には重症児の管理を常時受け入れられる NICU を 2.5 床/出生 1000 確保する。そして長期的には、病床、施設、地域の機能分担を含め、NICU をさらに増加させ、3 床/出生 1000 を目標値とする必要があることが示された。

■研究成果の刊行に関する一覧(楠田班)

研究成果の刊行に関する一覧表(楠田　聡)

平成19年度

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
楠田　聡	新生児の非侵襲モニタリング	山口　徹	今日の治療指針2007	医学書院	東京	2007	933-934
楠田　聡	未熟児貧血の治療は？	五十嵐　隆	EBM小児疾患の治療	中外医学社	東京	2007	675-684
楠田　聡	新生児仮死	田村正徳	小児科学	医学書院	東京	2007	第9章
楠田　聡	新生児薬物療法	MFICU協議会	MFICUマニュアル	メディカ出版	大阪	2007	486-491

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
横尾京子、楠田聡	毎日のケアにプラス!ストレスサインの見極めと痛みの緩和ケア】 採血時の痛みの予防　医師と看護師の協働	Neonatal Care	20	1208-1211	2007
柳貴英、丸尾良浩、楠田聡	周産期と黄疸　Up to Date】 産科における新生児管理	周産期医学	37	1257-1280	2007
楠田聡	診断ナビゲーション 酸塩基平衡の異常	周産期医学	37	560-562	2007
楠田聡	症候ナビゲーション 呼吸　呼吸困難	周産期医学	37	376-379	2007
羽鳥文麿、市川光太郎、植田育也、梅原　実、我那覇仁、楠田　聡、阪井裕一、桜井淑男、志馬伸朗、杉浦正俊、鈴木康之、竹内　護、森田　潔.	新生児・小児集中治療委員会報告	日本集中治療学会雑誌	14	351-357	2007
楠田　聡	PalibizumabによるRSV感染症の予防　新生児医療の進歩	小児科診療	70	659-663	2007

平成20年

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
楠田　聡	早産児と骨代謝	藤枝憲二	小児の骨と発達とその異常性	診断と治療社	東京	2008	64-68
中西秀彦、楠田　聡	新生児の交換輸血	大戸　斉、大久保光夫	周産期・新生児の輸血療法	メジカルビュー社	東京	2008	89-93
楠田　聡	イラストで学ぶ新生児呼吸管理	楠田　聡	イラストで学ぶ新生児呼吸管理	メディカ出版	大阪	2008	1-141
楠田　聡	NICUトラブルシューティング	楠田　聡	NICUトラブルシューティング	中外医学社	東京	2008	1-276
河井昌彦、楠田　聡	新生児内分泌ハンドブック	新生児内分泌研究会	新生児内分泌ハンドブック	メディカ出版	大阪	2008	1-229
楠田　聡	周産期マニュアル	東京女子医科大学母子総合医療センター	周産期マニュアル	メディカ出版	大阪	2008	1-362
楠田　聡	新生児の生理的特徴,胎児循環・呼吸と出生時の変化	松尾　理	よくわかる病態生理15　小児疾患	日本医事新報社	東京	2008	2-8

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
楠田　聡	1500～2500g生まれた赤ちゃんのケアの留意点	ペリネータルケア	27	1-6	2008
Fujioka H, Shintaku H, Nakanishi H, Kim TJ, Kusuda S, Yamano T	Biopterin in the acute phase of hypoxia-ischemia in a neonatal pig model	Brain Dev	30	1-6	2008
Masumoto K, Kusuda S, Aoyagi H, Tamura Y, Obonai T, Yamasaki C, Sakuma I, Uchiyama A, Nishida H, Oda S, Fukumura K, Tagawa N, Kobayashi Y	.Comparison of serum cortisol concentrations in preterm infants with or without late- onset circulatory collapse due to adrenal insufficiency of prematurity	Pediatr Res	63	686-690	2008

楠田　聡	新生児医療の経済的評価	周産期医学	38	117-120	2008
岡田賢司、楠田聡、望月博之、戸苅創、森川昭廣、西間三馨	RSウイルス感染重症化予防による後年の反復性喘鳴・喘息発症抑制効果の検討	日本小児科学会雑誌	112	1017-1020	2008
Wada M, Kusuda S, Takahashi N, Nishida H	Fluid and electrolyte balance in extremely preterm infants <24 weeks of gestation in the first week of life	Pediatr Int	50	331-336	2008
楠田　聡	Late Pretermに対応する周産期システムのあり方－新生児側から	周産期医学	38	1031-1035	2008
楠田　聡、福井トシ子	周産期医療の格差を考える	日本未熟児新生児学会雑誌	20	203-204	2008
楠田　聡	新生児内分泌疾患マス・スクリーニングに関連した最近の話題－低出生体重児の低T4血症―	ホルモンと臨床	56	945-948	2008
楠田　聡	副腎機能　周産期臨床検査のポイント	周産期医学	38	363-364	2008
大塚素子，小保内俊雅，増本健一，青柳裕之，山崎千佳，佐久間泉，平澤恭子，楠田聡，仁志田博司，大澤真木子	在胎28週の早産児に発症したビタミンB6依存性けいれんの一例	日本未熟児新生児学会雑誌	20	281-286	2008
楠田　聡、側島久典	医療の標準化による新生児医療の今後を探る	日本未熟児新生児学会雑誌	19	181-183	2008

平成21年

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
楠田　聡	ハイリスク新生児の予後の変遷	五十嵐　隆	小児科臨床ガイド	中山書店	東京	2009	12-18
添野愛基、楠田　聡	SGAの定義と疫学	小児内分泌学会	SGA低身長のマネジメント	メジカルビュー社	東京	2009	19-33
楠田　聡	新生児内分泌学：内分泌臓器の発生・分化	小児内分泌学会編	小児内分泌学	診断と治療社	東京	2009	117-121

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
楠田　聡	NICU必要病床数とその要員確保	産婦人科の実際	58	881-886	2009
森　雅亮、河島尚志、中村秀文、中川雅生、楠田　聡、佐地　勉、堤　裕幸、横田俊平、伊藤　進	RSウイルス感染予防を必要とする小児に関する全国調査の解析	日本小児科学会雑誌	113	1046-1048	2009
楠田　聡	RSウイルス感染症の現状とパリビズマブ投与による重症化抑制戦略	小児科臨床	72	1540-1548	2009
Miwa M, Kusuda S, Ikeda K	International Perspectives: Late-onset Circulatory Collapse in Very Low-birthweight Infants: A Japanese Perspective	NeoReviews	10	e381-e386	2009
楠田　聡	周産期（新生児）専門医	産科と婦人科	76	1334-1342	2009
森雅亮，河島尚志，中村秀文，中川雅生，楠田聡，佐地勉，堤裕幸，横田俊平，伊藤進，重症RSウイルス感染症調査委員会	RSウイルス感染予防を必要とする小児に関する全国調査の解析	日本小児科学会雑誌	113	1046-1048	2009
青柳裕之，楠田聡	周産期モニタリングup to dateとその応用 末梢循環モニタリング	周産期医学	39	511-522	2009

添野愛基，楠田聡	産婦人科専攻医の研修 何を教える?何を学ぶ?(周産期編) 蘇生　診断と対応のポイント	産科と婦人科	76	587-592	2009
桜井淑男，阪井裕一，楠田聡，渡辺博，藤村正哲	全国1～4歳児死亡小票から見た我が国の小児重症患者医療体制の問題点	日本小児科学会雑誌)	113	1795-1799	2009
青柳裕之，楠田聡，佐久間泉，山崎千佳，小保内俊雅，仁志田博司	Heating power法を用いた新生児の末梢循環血液量経皮的測定装置の開発	日本周産期・新生児医学会雑誌	45	1306-1310	2009
楠田聡	専門医ガイドブック～サブスペシャリティー選択のために 周産期(新生児)専門医(日本周産期・新生児医学会)	産科と婦人科	76	1334-1342	2009
楠田聡	明日の周産期医療への提言-若手スタッフの未来のために 周産期医療をenpowerするための提言 診療報酬からの新生児医療の支援	周産期医学	39	1254-1258	2009
楠田聡	明日の周産期医療への提言-若手スタッフの未来のために　現場でのジレンマの事例とその解決策　NICU満床の時 まとめ	周産期医学	39	1226-1228	2009
中西秀彦，楠田聡	水・電解質異常　最新の話題 早産児晩期循環不全	小児科	1561-1569	50	2009
楠田聡	周産期医療インシデントレポート リスクマネージメントと新生児医療の標準化	周産期医学	39	1124-1226	2009
楠田聡	周産期医療インシデントレポート 薬剤の選択	周産期医学	39	1082-1083	2009
楠田聡	周産期医療インシデントレポート 保育器からの転落事故	周産期医学	39	1074-1075	2009
楠田聡	周産期医療インシデントレポート 分娩台または帝王切開の手術台からの新生児の転落	周産期医学	39	1046-1047	2009

楠田聡、中澤誠	薬剤の臨床　RS(respiratory syncytial)ウイルス感染症の現状とパリビズマブ投与による重症化抑制の戦略	小児科診療	72	1540-1548	2009

研究成果の刊行に関する一覧表(内山　温)

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
内山温、楠田聡	超低出生体重児の急性期の管理	鈴木悟編	Neonatal Care NICU夜勤・当直マニュアル 秋季増刊号	メディカ出版	大阪	2007年	122-127
内山温	内分泌疾患を有する母体が児に及ぼす影響	新生児内分泌研究会編	新生児内分泌ハンドブック	メディカ出版	大阪	2008年	154-162
内山温	新生児の出生時の状態の評価方法について教えてください　他	太田博明、米山万里枝編	これだけは知っておきたい周産期ケアQ&A	総合医学社	東京	2008年	161-181

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
内山温、河野芳功 長澤宏幸、折居恒治 山本裕、久保寺訓子、 山田桂太郎	極低出生体重児における慢性肺疾患発症の危険因子の再検討	日本周産期新生児学会雑誌	43巻3号	659-664	2007年
内山温、河野芳功 長澤宏幸、折居恒治 山本裕、久保寺訓子、 山田桂太郎	未熟児動脈管再開通を認めた極低出生体重児の中期予後	日本周産期新生児学会雑誌	43巻4号	1033-1037	2007年
内山温	新生児の特徴と臨床	産婦人科治療	96巻増刊号	379-381	2008年
山田桂太郎、山本裕、 久保寺訓子、折居恒治 内山温、長澤宏幸、 河野芳功	新生児慢性肺疾患における副腎皮質刺激ホルモン、副腎皮質ホルモンおよびNa代謝の経時的変動の検討	日本周産期新生児学会雑誌	44巻1号	51-55	2008年

Yamada K, Yamamoto Y, Uchiyama A, Ito R, Aoki Y, Uchida Y, Nagasawa H, Ichiyama T, Hukao T, Kono Y	Successful treatment of neonatal herps simplex-type 1 infection complicated by hemophagocytic Lymphohistiocytosis and acute liver failure	Tohoku J Exp Med	214	1-5	2008年
Taketani T, Ito K, Mishima S, Kanai R, Uchiyama A, Hirata Y, Kumakura S, Yamaguchi S	Nenonatal isoimmue thrombocytopenia caused by type 1 CD36 deficiency having novel splicing isoforms of the CD36 gene	European J of Haematology	81	70-74	2008年
Yamada K, Uchiyama A, Arai M, Kubodera K, Yamamoto Y, Orii KO, Nagasawa H, Masuno M, Kohno Y	Severe upper airway stenosis in a boy with partial monosomy 16p13.3pter and partial trisomy 16q22qter.	Congenit Anom	49	85-88	2009年
内山温	新生児遷延性肺高血圧症	小児内科増刊号 小児疾患診療のための病態生理	41	151-155	2009年

研究成果の刊行に関する一覧表（戸津五月）

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
戸津五月	合成ペプチドを用いた人工肺サーファクタントのin vitro表面活性	岩手医学雑誌	59.1	11-16	2007
戸津五月	妊娠中の一般用医薬品乱用により離脱症候群をきたした新生児例	日本周産期・新生児医学会雑誌	44.1	135-138	2008
戸津五月	急性胃粘膜病変により大量出血をきたした健常正期産児	日本小児栄養消化器肝臓学会雑誌	23	31-35	2009
戸津五月	輸液計画：輸液管理のために知っておきたい低出生体重児の特徴	ネオネイタルケア	23.1	20-24	2009

研究成果の刊行に関する一覧表（平澤恭子）

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
平澤恭子	遺伝疾患と先天異常	宮尾益知	言語聴覚士のための基礎知識　小児科学・発達障害学	医学書院	東京	2009	30-41
平澤恭子	神経・骨・筋肉疾患	宮尾益知	言語聴覚士のための基礎知識　小児科学・発達障害学	医学書院	東京	2009	53-66
平澤恭子	対人関係の問題	桃井真里子	子どもの成長と発達の障害	永井書店	大阪	2009	102-110
平澤恭子	ハイリスク児の養護と発達促進	山口徹　北原光夫　福井次矢	今日の治療指針　２０１０年版	医学書院	東京	2010	1078-1079

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
平澤恭子	新生児・乳児の脳波	臨床脳波	49 (6)	378-386	2007
平澤恭子	発達神経学からみた developmental care	日本周産期・新生児医学会雑誌	43 (4)	1025-1028	2007
平澤恭子	新生児神経学的行動評価	周産期医学	38 (増刊)	564-573	2008
平澤恭子	新生児医療における amplitude integrated EEGの有用性	脳と発達	41 (2)	103-109	2009
平澤恭子　大澤真木子	小児てんかん最近の話題	神経内科	70 (3)	235-244	2009
平澤恭子	慢性肺疾患と神経学的予後	周産期医学	39 (5)	639-642	2009
平澤恭子	Bloch-Sulzberger 症候群	小児科診療	72 (増刊)	122	2009
平澤恭子	Brown-Sequard 症候群	小児科診療	72 (増刊)	125	2009
平澤恭子	新生児のステロイド投与と神経発達予後	周産期医学	39 (12)	1704-1708	2009

研究成果の刊行に関する一覧表（市場博幸）

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
市場博幸、山中聡子、大谷早苗	当院における糖尿病母体児（IDM）の検討　－臍帯血中IGF-I値の観点から	周産期医学	37	1216-1218	2007
市場博幸、保田典子	大阪における新生児死亡の推移　－NMCSデータベースを用いた解析	新生児白書	Ⅲ	79-80	2007
市場博幸	NMCSの新生児診療実績－推移、現状、問題点、展望	新生児白書	Ⅲ	85-90	2007
市場博幸	羊水と消化管の発達	周産期医学	37	1379-1382	2007
森啓之、市場博幸	第5章ルート管理、48 Aライン、新生児医療と看護の臨床手技70（堺武男編）	Neonatal Care	春季増刊号	230-235	2007
寺田明佳、市場博幸、郡山健、田中裕子、森啓之、大西聡、江原英治	極低出生体重児の胎便関連腸閉塞に対するガストログラフィン胃内投与の効果	未熟児誌	19	251-254	2007
森啓之、市場博幸、楠田聡	2004年に総合周産期母子医療センターで出生したCLD児の臨床像．アウトカムを指標としてベンチマーク手法を用いた質の高いケアを提供する「周産期母子医療センターネットワーク」の構築に関する研究	平成１8年度総括分担研究報告書		33-40	2007
田中裕子、市場博幸	子宮内発育遅延、周産期の症候・診断・治療ナビ	周産期医学	37増刊号	596-599	2007
市場博幸	母乳成分の科学　－ホルモン、生理活性物質など	周産期医学	38	1241-1244	2008
田中裕子、市場博幸	2003-2005年に総合周産期母子医療センターで出生した慢性肺疾患（CLD）児の施設間格差についての検討．「周産期母子医療センターネットワーク」による医療の質の評価と、フォローアップ・介入による改善・向上に関する研究	平成19年度総括分担研究報告書		34-41	2008

大西聡、市場博幸	ー周産期脳障害の要因ー　出生後の栄養状態による脳障害	周産期医学	38	709-713	2008
大西聡、市場博幸、寺田明佳、森啓之、田中裕子、江原英治	超低出生体重児のNICU入院中の栄養が長期予後に与える影響	周産期シンポジウム	26	67-73	2008
土岐彰、市場博幸	座長のまとめ　ワークショップ1「胎便吸引症候群の診断と治療」	周産期新生児誌	44	934	2008
寺田明佳、市場博幸、田中裕子、森啓之、大西聡、江原英治	胎便関連腸閉塞症に対するガストログラフィン胃内投与法の検討.　ワークショップ1「胎便吸引症候群の診断と治療」	周産期新生児誌	44	935-938	2008
大西聡、市場博幸、寺田明佳、森啓之、田中裕子、江原英治	超低出生体重児のNICU入院中の栄養管理が長期予後に与える影響	周産期新生児誌	44	958-961	2008
郡山健、寺田明佳、大西聡、森啓之、田中裕子、江原英治、市場博幸	大阪市立総合医療センター新生児集中治療室における超低出生体重児の予後の検討—AFD児とLFD児に分けての検討	周産期新生児誌	44	1187-1191	2008
寺田明佳、市場博幸	胎便関連腸閉塞症に対するガストログラフィン胃内投与法	日児臨薬誌	21	61-64	2008
市場博幸	新生児搬送　まとめ	周産期医学	39	1206	2009
今田理恵、新宅治夫、山野恒一、市場博幸	どうしたら女性医師がNICUで働き続けることが出来るのか、また新生児医療に携わり続けることが出来るのか　～私たちの声　大阪新生児診療相互援助システム（NMCS）をベースにしたアンケート調査より	未熟児誌	21	76-84	2009
松村寿子、市場博幸、保田典子、寺田明佳、大西聡、森啓之、田中裕子、江原英治	NICUにおける標準予防策の徹底がMRSA保菌者数、感染者数に及ぼす効果	未熟児誌	21	231-236	2009
齊藤三佳、市場博幸、山野恒一	慢性肺疾患の病態に関わる細胞増殖因子に対する薬剤の作用の検討	未熟児誌	21	243-249	2009
森啓之、市場博幸	新生児低カルシウム血症.　小児疾患診療のための病態生理	小児内科	41増刊号:	180-183	2009

田中裕子、市場博幸、青谷裕文、猪谷泰史、加部一彦、佐久間泉、松浪桂、楠田聡	2003-2005年に総合周産期母子医療センターに入院した25週未満の児の慢性肺疾患の検討	周産期新生児誌	45	1055-1057	2009
寺田明佳、市場博幸、田中裕子、森啓之、大西聡、原田明佳、岩見裕子、江原英治	医療者によるグリーフケア-ＮＩＣＵにおける実例か	周産期新生児誌	45	1251-1253	2009

研究成果の刊行に関する一覧表（米本直裕）

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Nagai S, Andriana rimanana D, Rabes andratana N, Yone moto N, Nakayama T, Mori R.	Earlier versus later continuous Kangaroo Mother Care (KMC) for stable low-birth-weight infants: a randomized controlled trial.	Acta Paediatr			2010 Jan 27 [Epub ahead of print]
Mori R, Yonemoto N, Fitzgerald A, Tullus K, Verrier-Jones K, Lakhanpaul M.	Diagnostic performance of urine dipstick testing in children with suspected UTI: a systematic review of relationship with age and comparison with microscopy.	Acta Paediatr			2010 Jan 5. [Epub ahead of print]
Uetani K, Nakayama T, Ikai H, Yonemoto N, Moher D.	Quality of reports on randomized controlled trials conducted in Japan: evaluation of adherence to the CONSORT statement.	Intern Med	48(5)	307-13	2009
西原正泰　南佐知子　八木重孝　米本直裕　柳原格　樋口隆造	和歌山県における後期死産の検討（2003-2007 年）	日本周産期・新生児医学会雑誌	第45巻第4号	1350-1354	2009
細川俊一 米本直裕 北島博之	当センターNICU における 26 週未満の IVH 症例の検討	日本周産期・新生児医学会雑誌	第45巻第4号	1197-1200	2009
和田浩(淀川キリスト教病院 小児科)，米本直裕，楠田聡，藤村正哲	周産期ネットワークデータベースにおける母体搬送・新生児搬送に関する検討(第 1 報)　搬送における背景因子について	日本未熟児新生児学会雑誌(1347-8540)	21巻3号	694	2009. 10
三ツ橋偉子(大阪府立母子保健総合医療センター 新生児科)，平野慎也，米本直裕，北村真知子，藤村正哲	フェノバルビタール投与と 3 歳時の発達指数の検討　新生児臨床研究ネットワーク(NRN)インドメタシン Study より	日本未熟児新生児学会雑誌(1347-8540)	21巻3号	481	2009. 10
平野慎也(大阪府立母子保健総合医療センター 新生児臨床研究ネットワーク)，米本直裕，北村真知子，藤村正哲	インドメタシン(IND)を用いた超低出生体重児の脳室内出血(IVH)の発症予防に関する研究　長期予後　3 歳時発達指数(DQ)の検討	日本未熟児新生児学会雑誌(1347-8540)	21巻3号	481	2009. 10

平野慎也(大阪府立母子保健総合医療センター 新生児臨床研究ネットワーク), 米本直裕, 北村真知子, 藤村正哲	インドメタシン(IND)を用いた超低出生体重児の脳室内出血(IVH)の発症予防に関する研究　長期予後　3歳時発達指数(DQ)の検討	日本未熟児新生児学会雑誌(1347-8540)	21巻3号	481	2009.10
米本直裕, 河野由美, 三科潤, 楠田聡, 藤村正哲	厚生労働科学研究「周産期母子医療センターネットワーク」研究班 周産期ネットワーク登録極低出生体重児の3歳時予後(1)　施設間比較と予後指標の検討	日本周産期・新生児医学会雑誌(1348-964X)	45巻2号	707	2009.06
石井のぞみ(愛育病院 小児科), 佐藤紀子, 安藤朗子, 加部一彦, 山口規容子, 米本直裕, 河野由美	極低出生体重児の3歳予後と集団保育参加の関係について	日本周産期・新生児医学会雑誌(1348-964X)	45巻2号	579	2009.06
河野由美, 米本直裕, 三科潤, 楠田聡, 藤村正哲	厚生労働科学研究「周産期母子医療センターネットワーク班」 周産期ネットワーク登録極低出生体重児の3歳時予後(2)　在胎30週未満の在胎週数別検討	日本周産期・新生児医学会雑誌(1348-964X)	45巻2号	577	2009.06
細川真一(大阪府立母子保健総合医療センター 新生児科), 米本直裕, 北島博之	新生児脳保護　IVH/PVL 当センターNICUにおける26週未満のIVH症例の検討	日本周産期・新生児医学会雑誌(1348-964X)	45巻2号	370	2009.06
河野由美, 三科潤, 米本直裕, 藤村正哲	厚生労働科学研究周産期フォローアップ班 周産期ネットワーク施設の極低出生体重児の3歳時フォローアップ率への影響要因の検討	日本小児科学会雑誌(0001-6543)	113巻2号	395	2009.02

研究成果の刊行に関する一覧表(森臨太郎)

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
Rintaro Mori		Eyal Sheiner	Textbook of Perinatal Epidemiology	Nova Science Publishers		2010	

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Lumbiganon P, Laopaiboon M, Gülmezoglu AM, Souza JP, Taneepanichskul S, Ruyan P, Attygalle DE, Shrestha N, Mori R, Hinh ND, Bang HT, Rathavy T, Chuyun K, Cheang K, Festin M, Udomprasertgul V, Germar MJV, Yanqui G, Roy M, Carroli G, Ba-Thike K, Filatova E, Villar J	Mode of delivery and pregnancy outcomes in Asia: The WHO Global Survey on Maternal and Perinatal Health 2007-2008	*Lancet*	Early Online Publication		12 January 2010
Mori R, Khanna R, Pledge D, and Nakayama T	A meta-analysis of physiological effects by skin-to-skin contact for newborns and mothers	*Pediatrics International*	Early Online Publication		11 June 2009
Mori R, Shiraishi J, Negishi H, and Fujimura M	Predictive value of Apgar score in infants with very low birth weight	*Acta Paediatrica*	*97*(6)	720-723	2008
Mori R, Fujimura M, Shiraishi J, Evans B, Corkett M, Negishi H & Doyle P	Duration of inter-facility neonatal transport and neonatal mortality: a systematic review and a cohort study	*Pediatrics International*	Vol. 49 No. 4		2007
森臨太郎	新生児医療の標準化と未熟児動脈管開存症診療ガイドライン	近畿新生児研究会会誌	第18号	1-6	平成21年12月